



日本学術会議第19期

会長就任挨拶

黒川 清

第19期の会員の皆様のご指名を受けて日本学術会議会長に選出された。重責に身の引き締まる思いである。私は第17期に『学術の動向』編集委員を、そして第18期は第1部の吉田民人会員とともに副会長を務めさせていただいた。また「日本の計画」特別委員会委員長を務め、日本の歴史的背景と現時点での国際化時代への日本の課題を考察することもできた。行政改革の中での日本学術会議と総合科学技術会議の「日本学術会議のあり方委員会」、そして国際的に激変しつつある世界の科学アカデミーの動きに接する貴重な機会を得た。

このような経過をへて日本学術会議の抱える課題、そして「科学者コミュニティ」を代表する科学アカデミーとしての日本学術会議が、21世紀に目指すべき方向については、かなりはっきりと理解できたと私は考えている。

日本学術会議の抱えるいくつかの課題

1. 法改正へ向けた問題

新しい体制での日本学術会議のあり方については、現在、関係府省による法改正へ向けた準備が進行中である。われわれは、その進捗を見守るとともに、協力できるところには積極的に関与していく必要がある。幸いに第18期の改革推進委員会の40回近い議論をへて、細部、細則等は新体制の日本学術会議に任せることなのかもしれないが、すでに理論的には大まかな方向は描けているとい

える。これをどう具体化していくか、関係府省との間には微妙な問題を、第19期日本学術会議としては抱えているといえよう。そのために、関係府省との協力と信頼関係の構築が必須と思われる。

2. 会員、組織のあり方

第13期以来の日本学術会議会員は「学・協会」を母体に出出されてきた。しかし、これからの日本の「科学者コミュニティ」を代表する機関として日本学術会議を育成していくとなると、この選出方法は必ずしも適切ともいえない点をいくつも含んでいる。米国や英国などの科学アカデミーではco-optationにより会員を選出している。そのような科学者会員から構成されることが、これからの日本学術会議の要件として必須であろう。

日本学術会議をこのような機関に育てていくことがこれからの課題であり、国内、国際社会におけるわれわれの責任である。おおよそ平成17年ごろになるのかと思われるが、新体制の日本学術会議会員が選出されてから速やかに次のステップがとれるような、対外的にも信頼に値する、しかも新日本学術会議のために論点が整理された対応案を、第19期のわれわれは準備しておく必要がある。

新しい日本学術会議は当分の間は「国の特別の機関」と位置づけられるため、審議会委員等の例を考えると「70歳定年」となると思われる。しかし、



写真左から戒能通厚副会長、黒川 清会長、岸 輝雄副会長

会員歴のない70歳を超えておられる多くの優れた科学者も、直接「シニア」な資格で参加される方策を考えておくべきであろう。

新体制の日本学術会議では「研究連絡委員会」はなくなり、「課題別委員会」が構築されると思われる。今後創設される3部門を通して選出された会員は、これらの「課題別委員会」の一つに属するとしてもよい。この「課題」は学問「分野」により構築することもできるし、また「新たな課題」ごとに組織できると考えられる。これらの委員会から、横断的に現在の特別委員会のような時限的な「課題」を適切に、機能的に構築していくことが考えられよう。いくつかの常置委員会も必要である。また国際学術アカデミーへの対応が可能な機関は、わが国では日本学術会議しか存在しないことを考えれば、この機能強化はこれからの課題として重要なものの一つである。

3. 社会のための科学者コミュニティ代表としての日本学術会議

日本学術会議は多くの優れた報告書を提出している。しかし、その成果はこれらを必要としている広い範囲の対象に、必ずしも適切に届いてはいない。「情報循環」のための方策を戦略的に構築すべきであると考えられる。これは単なる新聞各社論説

委員、科学担当記者たちとの懇談だけでは不十分で、より積極的な広報活動が必要で、会員一同の創造的智恵と支援活動も重要と思われる。科学技術が社会の広い範囲に日常的に普及している現在、一つひとつの報告書は対象を意識した体裁と内容にする配慮が必要であろう。ホームページの充実も喫緊の課題である。

日本学術会議は、過去3年間に毎年国際会議を主催し、国際的な認知度も高くなっている。これらの成果、報告書の扱い、配布等にも戦略的思考が必要であろう。

また各地域での日本学術会議の活動も推進すべきであり、大学のみならず、初等中等教育の場へも、元、現の会員一人ひとりが積極的に会話、対話の場を設定して学術の「先輩」としてのお手本を広く示していただきたい。

おわりに

この改革の時代、第19期会員の活動は第18期までの会員の残した「遺産」をもとに、まさに新しい日本の科学者コミュニティ構築への基礎を作るということにこそ、その歴史的意義を見出すべきであるといえよう。

第19期会員の皆様のご協力とご支援をいただきつつ、まさにこのような未来志向でわれわれの使命を達成していきたい。大いに会員の皆様とは議論を重ね、また、本誌の誌上でも、折々に私の見解をお読みいただき、読者の皆さまとも意見の交換を重ねていければ幸いである。